

地域における歴史の継承についての一考察

—松山市三津浜地区の井口松江と松江堂を事例として—

(社会科教育講座) 川瀬 久美子

Inheritance of Local History: A Case Study of Iguchi Matsue and Matsue-do in Mitsuhamama, Matsuyama

Kumiko KAWASE

(2024年9月2日受付, 2024年11月27日受理)

キーワード: 地域史 (local history)、歴史の継承 (inheriting of history)、
松山市三津浜 (Mitsuhamama in Matsuyama)、井口松江 (Iguchi Matsue)、松江堂 (Matsue-do)

1. はじめに

地域住民が自らの住まう土地の歴史を学ぶことは、その土地への愛着を深め、より良い地域社会を形成する原動力の一つとなる。古くから伝わる寺社仏閣、城郭や偉人の住居、さまざまな施設や街並み、記念碑は、地域史を理解していく上で、具象的な手がかりになる。このような歴史的建造物などは、時間の経過とともに老朽化したり消失したりすることがあり、その維持管理や継承は各地の地域づくり・まちづくりの課題の一つである。

歴史的建造物の中でも銅像や記念碑は、歴史的対象や人物を顕彰したり教訓として後世に伝える意図で作られたものである。しかし、ひとつの事柄や人物に対する評価が、評価する人・集団によって異なるのは当然であるし、時代の変化によって評価も変わる。史実に対する評価が変化したため撤去された銅像の事例として、旧ソ連時代に設置されたスターリン像やレーニン像¹⁾、米国の南北戦争で南部連合の軍を率いたロバート・E・リー将軍の銅像²⁾など

がある。日本では、かつて薪を背負って本を読みながら歩く二宮尊徳(金次郎)の銅像が勤勉精神を表すとして、多くの小学校に設置されていた。しかし、近年は老朽化のため撤去され、その姿が現代にそぐわないとして、新しい二宮金次郎の銅像が設置される例は稀のようである³⁾。一方、伊達正宗や坂本龍馬のような著名な歴史上の人物の銅像は観光名所となっているが、これまであまり脚光を浴びていなかった地域の偉人が再評価され、没後・生誕周年に合わせて新しく銅像が設置される例は各地にある⁴⁾。

筆者は、松山市西部の三津浜地区の「松江堂」再建に関わるなかで、地域の歴史的人物を顕彰した建造物の継承について考える機会があった⁵⁾。井口松江という江戸時代に実在した女性の墓碑を囲った松江堂を、「地域の史跡」として再建しようという取り組みに対し、そもそもの「松江堂」は古い女性観に基づいて井口松江を讃えて建設されたものであり、それを再建することは古い女性観を肯定することになるのではないか、という批判が一部の市民か

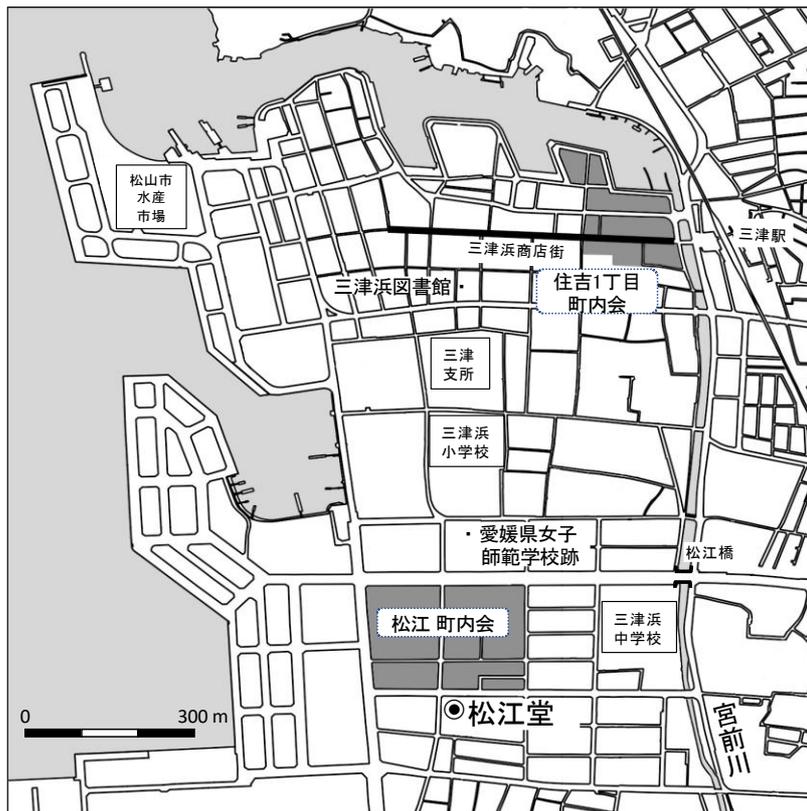


図1 松山市三津浜地区

ら挙げられた。現在の私達の価値観とは異なる評価基準で礼賛された人物を、私達はどのように後世に伝えていくべきか、あるいは伝えていかにしないようにすべきか。社会における人々の価値観の変容はこれまでもあり、今後も起こる可能性がある。変容する社会の価値観に対して、歴史的な顕彰物の継承にはどのような課題や意義があるのだろうか。

本稿では、井口松江と松江堂の歴史的評価と現代的意味を検討し、アンケート調査で得られた井口松江や松江堂に対する住民の認知や意識を参考としながら、変容する社会の価値観に対して歴史的な顕彰物の継承はどのように臨む必要があるのか、またどのような課題や意義があるのか検討する。特に、悲劇の継承（負の遺産、悲しみの遺産）のように場所や建物に評価や意味づけをして伝えるという観点から、ダークツーリズムに関する先行研究を手がかりに考察する。

なお、本稿でいう「三津浜地区」は三津浜地区まちづくり協議会の組織範囲をさし、三津浜小学校の校区（図1の宮前川の左岸地域）を指す。

2. 松山市三津浜地区の概要

三津浜地区は松山市西部に位置し、まちの始まりは、中世に河野通春が港山に居城を構えた際に、毎朝城兵の米穀魚菜を近郷の民より買上げたため、港山の対岸の三津浜に市場が発生したことによる。江戸時代からは、三津浜は松山藩の海の玄関口として栄え、瀬戸内海沿岸各地の物通を担う商家が集まり、沿岸で獲られた魚介類も取引された。松山城の城下町として発展した現在の松山市の中心市街地（大街道・銀天街界限）とは明治時代になると鉄道で結ばれ、松山出身の俳人・正岡子規や松山で教鞭をとった夏目漱石は東京との行き来に海路で三津浜を経由した。戦前の三津浜には遊郭や映画館が存在し、一つの経済・文化圏を形成していた。松山の中心市街地が第二次世界大戦の松山空襲で焼け野原になったのに対し、三津浜は空襲を免れた。そして、戦後の高度経済成長期には、みかん栽培や漁業で潤った近隣の島々から、日用品、時計・着物などの高級財の購入、遊興を求めて人々が集まり、三津浜商店街は賑わいを極めた。しかし、昭和末期以降は全国の商店街の例に漏れず三津浜商店街の活気は失われた。松山の中心部まで電車で15分という利便性

にも関わらず、あるいはその利便性が地元商業には不利に働いたのか、地域経済は活力を失い、少子高齢の街へ変貌した。令和6（2024）年4月1日時点の三津浜地区の人口は4,227人、世帯数は2,080世帯である。65歳以上の人口（高齢化率）は38.4%であり、総人口約50万人の松山市全体の高齢化率29.2%に対して、特に高齢化が進んでいる地区といえる。

3. 井口松江と松江堂

井口松江については、大洲市誌や愛媛県史の人物編で取り上げられている（大洲市誌編纂委員会1996、愛媛県史編さん委員会1986、1989）。また、後述するような松江について書かれた諸資料に基づくと、その半生は以下のようなものであった。

井口松江（1796～1813）は寛政8年、大洲藩士井口瀬兵衛の二女として生まれた。父親の井口瀬兵衛は長男の諍いによって大洲藩を追われ、三津浜で道場を開いて剣術を教えて暮らしていた。文化10（1813）年のある夜、門弟の岩蔵という若者が、瀬兵衛の留守を狙って仲間と共に井口宅に押し入り、当時18歳の松江を無理やりさらって自分の妻にしようとした。岩蔵の狼藉に抵抗した松江は、短刀で岩蔵を斬り殺してしまった。松江は帰宅した父親に、理由はどうあれ人殺しは罪であるし、申し開きをするにも一旦は奉行所の牢に囚われる事になり、家に大変恥をかかせて迷惑をかける、と父親に首を刎ねるよう頼んだ。その願いを受入れた父親は、松江の妹の千代も連れて三津の浜辺へ行き、松江の首を刎ねた。

この話を聞いた11代松山藩主松平定通は、父娘とも武士として立派な態度であると褒めて、葬儀のために米5俵を贈り、瀬兵衛を松山藩で召し抱えようとしたが、瀬兵衛は固辞した。松江父娘の行いを聞いた10代大洲藩主加藤泰済は、浪人していた瀬兵衛の帰藩を許し、伊予三島町で瀬兵衛が62歳で死ぬと、息子が大洲藩の士官となり大変難しいお家の再興が叶った。

なお、上記の一連の出来事について、井口松江の墓碑以外の一次的な史料は、今のところ発見されて

いない。景浦（1919、1942）は井口瀬兵衛の家系について探究を試みているが、大洲御家中分限配（筆者不明）に井口姓のものが何名か認められるが瀬兵衛の名はなく、浪人になるにあたって改名した可能性を指摘している。瀬兵衛の妻は宇和島藩の若妻勇右衛門（祐右衛門）の女とされ、松江には兄姉妹弟が一人ずつおり、末弟の子が明治28年に没した後、姉の子が執筆当時どのような状況か不明、としている。しかし、令和6（2024）年に井口家の末裔である井口健氏が、井口家の菩提寺の過去帳や墓石調査などに基づいて先祖について調べられてきた成果をまとめられた（井口2024）。それによると、大先祖井口長兵衛（1662年没）は、山城国野尻村（現在の京都府八幡市）が生国で、円明院侯（加藤泰興）に料理人として仕え、その心掛けが評価されて知行百石を下し置かれた。その後、井口一族がどのような経緯で大洲の地にたどり着いたかは不明だが、長兵衛の4人の男子の系が幕末まで大洲藩士として続いたという。

松江の墓は三津浜に建てられ、その後は、男女、特に三津浜にあった遊郭の女達が「縁切り」を祈願して詣でていたという（景浦1919）。それを「忌まわしい風説」と考えた景浦直孝らの働きかけによって、明治26（1893）年私立愛媛県高等女学校（現在の県立松山南高等学校の前身）を中心に、井口松江を模範として婦徳向上を目的とした松操会が作られ、明治36（1903）年に井口松江の顕彰碑が三津に建設された。大久保（2021）によると、松江の墓石には、明治34（1901）年の写真では小さな屋根がかかっており、昭和4（1929）年の写真ではさらに大きな屋根を持つお堂のようになっている写真があるという。明治30年代から昭和初期にかけて、墓石を屋根で守る松江堂の原型が作られたようである。松江の墓の北には明治43（1910）年に愛媛県女子師範学校が開校し、その在校生と卒業生や地元住民によって、松江堂は手入れされ護られてきた。昭和49（1974）年には烈女松江奉賛会により鉄筋コンクリート製の「松江堂」が建設された⁶⁾。

三津浜地区まちづくり協議会によると、松江堂は老朽化で倒壊の危険があったため、平成20年前後



写真1 井口松江の墓(2021年1月 川瀬撮影)



写真2 再建された松江堂(2021年12月 川瀬撮影)



写真3 松江堂内部(2021年12月 川瀬撮影)

に撤去された(写真1)⁷⁾。しかし、井口松江の墓の手入れをしている住民から「松江さんの墓が雨ざらしなのが忍びないので、松江堂を再建してほしい」という要望がまちづくり協議会に挙げられた。そこで、まちづくり協議会は10年計画で建設費を積み立て、令和2(2020)年のまちづくり協議会10周年

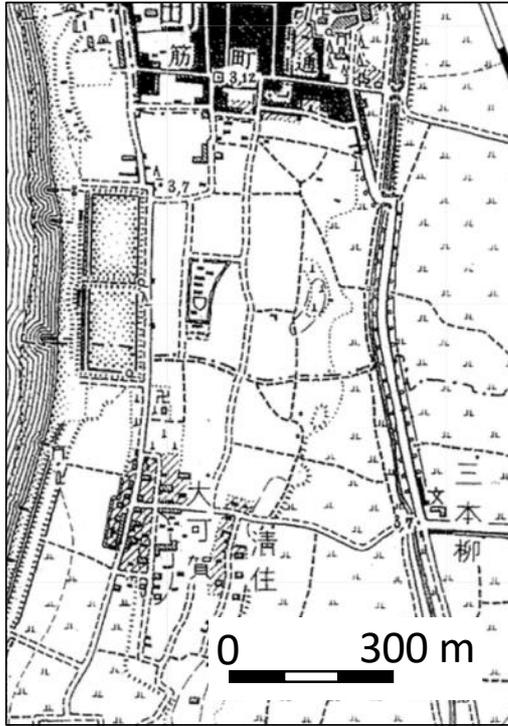
の記念事業の一つとして、再建工事を始めた。新型コロナウイルスの蔓延で工事が中断し、結局、令和3(2021)年度に松山市の賑わい創出施設整備事業助成を受けて、地域の交流拠点(休憩所)として完成した(写真2・3)⁸⁾。

なお、松江の墓跡があった土地は、昭和45(1970)年から松江町と改称され、近くの宮前川を渡る橋も松江橋と命名された。

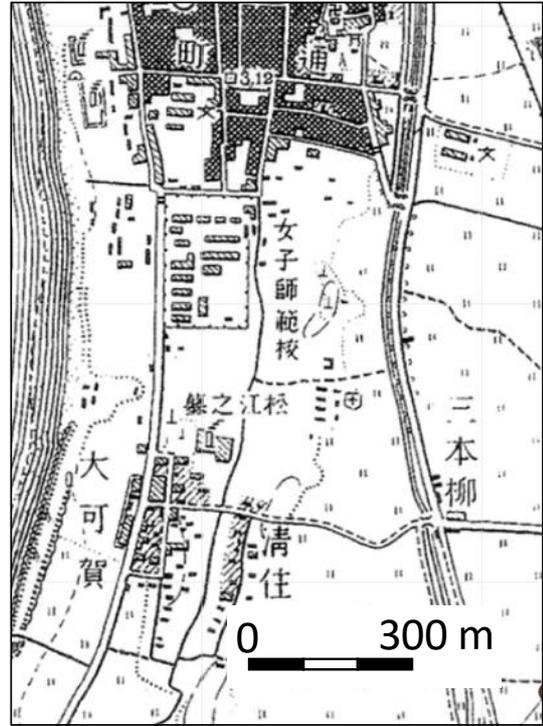
旧版地形図で、松江堂や町名はどのように表記されているのだろうか。図2に示すように、明治36年測図38年発行の2万分の1地形図「松山」では、現在の松江町の西側には砂浜と塩田があり、その周辺には土地利用記号表示のない白抜きの区画があり、「大可賀」と「清住」の集落と地名表記がある。この大可賀の集落の北端に寺院の地図記号一つと石碑記号が6つ認められる。集落の北外れに寺院と墓地があったと想像される。昭和3年測図30年資料修正・発行の2万5千分の1地形図「三津浜」では「女子師範校」の記載があり、その南に石碑記号と「松江之墓」の付記がある。地形図の資料修正は、市町村の合併や鉄道の新設など、比較的大きな変化のあった場合、その項目だけを官報や関係機関からの資料だけで修正することで、現地調査は行ってない場合が多く、特定の項目しか修正していない⁹⁾。この30年発行の地形図には「資料修正(行政区画)」とあり、行政区画以外の部分は昭和3年の測図から変更していないと考えられる。明治43(1910)年に三津浜に開校した愛媛県女子師範学校は、昭和23(1948)年に城北地区に移転しており、この地形図が昭和3年測図当時の様子を表していることと矛盾しない。昭和41年改測44年発行の地形図では、「女子師範学校」も「松江之墓」の表記も無く、街区が整えられて宅地が立地し三津浜中学校を示す学校の地図記号が認められる。かつて大可賀の共同墓地にあった松江の墓と顕彰碑は、大可賀墓地が市営の大明神墓地へ統合移設された昭和42(1967)年前後、三津大可賀公園の敷地内に占有許可を得て移設されたという(大久保2021)。したがって、昭和41年改測の時点では集団墓地は移転した後だったかもしれないが、松江の墓碑と石碑は移転前の集団

墓地か移転後の現在の位置に存在していたと推測される。しかし、特に松江の墓に関する記載はない。学校の地図記号の西側、女子師範学校があった付近に「西須賀町」と記載されている。昭和60年修正61

年発行の地形図では、「西須賀町」が「松江町」に置き換わっている。昭和44年発行と61年発行の地形図では、松江堂は石碑表示もされていない。なお、最新の2014(平成26)年発行の地形図でも、石碑な



明治36年測図明治38年発行「松山」



昭和3年測図30年資料修正・発行「三津濱」



昭和41年改測44年発行「三津濱」



昭和60年修正61年発行「三津濱」

図2 旧版地形図における松江の墓や松江町の地名

明治38年発行は2万分1、それ以外は2万5千分1を同一縮尺に拡大

どの地図記号の表記はない。

以上のように、明治 38 年発行の地形図には松江の墓を含むであろう墓群の記号があり、昭和 3 年測図の頃には女子師範校とともに「松江之墓」と記載されるほど、松江の墓が地図製作者も認めるこの地域のランドマークとなっていたことがわかる。

4. 「井口松江」に関する評価の変遷

井口松江落命の出来事に対する評価は時代によって変化し、その時々々の評価が出版物や顕彰碑、松江堂の建設という形になって示され、それらによってさらに松江の評価が一般に広まる、ということが繰り返された。表 1 に、井口松江に関する動きを年

表にまとめた。また、表 2 に松江について書かれた文献を整理した。

まず、江戸時代の松山藩主松平定通は、松江が貞節を守ったことと、お家に迷惑がかかることを避けて断首を望んだことを評価した。さらに、大洲藩主加藤泰済は、井口瀬兵衛が人を殺めた責任を取ろうとした愛娘を斬首したことと、松山藩士への取り立てに対して、「忠君は二君に仕えず」と丁重に辞退したことを評価した。どちらも、武士道や忠孝の観点からの賛美である。

松江の墓は三津浜に建てられ、その後は、庶民や遊郭の女達が「縁切り」を祈願して詣でていた。つまり、江戸時代か明治時代に入ってから、庶民の特

表 1 井口松江と松江堂に関わる年表

文化10 (1813)年	井口松江 大可賀の浜で斬首される 松山藩主松平定通が米 5 俵を贈り顕彰する 大洲藩主加藤泰済が父瀬兵衛の帰藩を許す
江戸時代～明治時代	松江の墓が縁切りを望む女性の祈願の対象となる
明治26 (1893)年	私立愛媛高等女学校を中心に松操会が結成される
明治30年代?	松江の墓石に屋根囲い
明治36 (1903)年	松操会が井口松江の顕彰碑を建立
明治43 (1910)年	愛媛県女子師範学校が三津浜に開校
昭和初期?	松江の墓石にお堂建立
昭和45 (1970)年	大可賀町と西須賀町の一部が松江町に町名変更される 宮前川にかかる橋が松江橋と命名される
昭和49 (1974)年	烈女松江奉賛会が松江堂建設
平成13 (2001)年	芸予地震で松江堂破損、その後解体
令和 2 (2021)年	三津浜地区まちづくり協議会が松江堂再建

表 2 井口松江に関する記録や出版物

1901	田中好賢・景浦直孝	『烈女松江』向井湊居堂, 21p
1912	西園寺源透 編著 山田武八郎 速記	『烈女松江事蹟集』56p 烈女松江の話. 史談会速記録 第254集 (井口2024による)
1914	田中好賢・景浦直孝	『薩摩琵琶歌 烈女松江』湊居堂, 12p
1915	田中好賢・景浦直孝	『烈女松江』三津浜尋常高等小学校写, 6p
1919	景浦直孝	烈女松江. 伊予史談, 16, pp.896-911
1923	晩村	烈女松江. 青年と処女, 創刊号, 愛媛青年処女協会, pp.42-47
1941	小崎春洋	『伊予遺聞叢書 第一篇 烈女松江』伊予名著刊行会, 28p
1942	景浦直孝	『愛媛先賢叢書7 烈女松江伝』大政翼賛会愛媛県支部, 66p
1969	小松敬一郎	松江という名の烈女. 松山百点, 第26号, pp.31-34
1986	愛媛県史編さん委員会編	第二章 藩政の展開 第一節 松山藩 松平定通の藩政改革. 『愛媛県史 近世 上』愛媛県 p.257
1989	愛媛県史編さん委員会編	井口 松江. 『愛媛県史 人物』愛媛県 p.36
1996	大洲市誌編集委員会	第七編 人物 井口松江. 『大洲市誌 上』大洲市 p.756
2003	松山百点会	烈女松江の墓(松山市・三津公園). 松山百点, 第233号, pp.46-47

に遊女などの女性が「女性から悪縁を断ち切った」ことを評価して松江の墓を参拝し、自らの悪縁断絶を祈願するようになっていた。

そのような女性達の参拝に対して素封家が「憤慨」し顕彰した(景浦 1919)ということは、「言い寄る男を撃退した」行為の崇拜を否定しながら、別の観点で井口松江に対して高い評価が与えられていたことを意味する。「悪縁を断ち切った」ことより「貞節を守った」ことが重視されるようになる。

近代以降の松江の評価の高まりには、小学校や県立高等女学校の教員を勤めた田中好賢や景浦直孝の働きが大きい。彼らにとって、松江は貞節を守り、お家に迷惑がかかることを避けるため自ら死を望んだ「烈女」であり、婦女の鑑であった。二人は、「薩摩琵琶歌」や伊予史談会の論文に「烈女松江」を取り上げ、松江を婦女の鑑として、一般にもその物語や評価が流布するように働きかけた。明治 34 (1901) 年に発行された田中好賢「烈女松江」が愛媛県立図書館に保管されており、表紙には「松山松操會作歌及作曲」と、判で押したような赤字で「建碑義捐出版」とある。これについて、大久保(2021)は松江の顕彰碑の寄付集めか、その返礼のために配られたものの一部ではないかと推測している。また、「烈女松江」は挿絵入りの物語(晩村 1923)として出版されるなど、一般大衆に親しまれる一方、昭和 17 (1942) 年には大政翼賛会愛媛県支部から愛媛先賢叢書の 7 巻として「烈女松江」が発行された(景浦 1942)。松江は、当時の社会規範における模範的女性を体現した^{アイドル}偶像として、讃えられたのである(大久保・川瀬 2023)。

このような近代以降の松江の評価の高まりや松江堂の建設に関して、大久保(2021)は、富国強兵と戦争遂行のために、不名誉な生より名誉ある死を選ぶべしと、その時々権力者達が人々を教化するのに利用してきた、と指摘している。

明治 36 (1903) 年に松江の顕彰碑を建設した婦人教育団体松操会は、明治 26 (1893) 年に私立愛媛高等学校女学校内に設立された団体で、松江の貞烈を表彰し婦女の鑑とすることを謳っている。また、松江の墓のそばには明治 43 (1910) 年に開校した愛媛県

女子師範学校があり、田中景浦が作詞した「烈女松江」が愛唱歌として生徒達に歌われていたという。愛媛県女子師範学校は、昭和 18 (1943) 年に官立愛媛師範学校女子部となり、松江堂の手入れは女子師範学校の生徒達が担っていた。女子師範学校の校舎は空襲を逃れたが、1948 (昭和 23) 年に城北地区に移転した。しかし、女子師範学校の移転後も主に近隣に居住する卒業生達が墓や松江堂の掃除をしたり、毎年、供養祭を開いて集まっていたようである。

井口(2024)は東京にて「史談会速記録」に「烈女松江」の記録が保管されていることを発見している。大正元(1912)年に記録されたそれによると、幕末の伊予松山藩士であった内藤素行は、「ある昔の話をしていただきます。私共の地方の文化年間に一の烈女がおりまして、壮烈なる死を遂げましたという事件であります。このところ、乃木夫人の如き方もおりましたから、つい思い出しました概略をお話いたします。この女は珍しい感心な者であります」と話しているという。乃木夫人とは、明治天皇の崩御にあたって殉死した陸軍大将乃木希典の妻、乃木静子のことであり、夫とともに自死した。乃木夫妻の殉死には一部で批判もあったが、一般的にはこぞって賞賛されていたという。内藤素行が井口松江を語る際にこの事件に触れたように、日本全体がこの事件に酔うような世情の中で、松山という地方都市においては烈女松江礼賛の熱が上昇していったのかも知れない。

戦前・戦中の思想教育やその社会への広がりによって由来する松江の奉賛は、戦後も続いた。昭和 45 (1970) 年の西須賀町から松江町への改称や松江橋の命名のほかに、松江町に中四国に展開するスーパーマーケットチェーン「フジ」が開業した際にも、住民からの要望があつて「松江店」という名称となったとのことである¹⁰⁾。

昭和 49 (1974) 年の烈女松江奉賛会による「松江堂」の建設など、女子師範学校卒業生や地域住民にとっての「松江」への愛着は並々ならぬものがあつたと推測される。例えば、愛媛新聞データベース(1992 年以降)で「井口松江」のキーワード検索を行うと、松江堂の法要の様子の記事が、1992 年、

93～95、97年に掲載されている。平成4（1992）年の記事では、奉賛会と地元住民で約100名が集まったと記載されているが、平成6（1994）年の記事では参加者は約60名記載されており、徐々に集まりが縮小していったと推察される。法要の記事は97年が最後で、平成17（2005）年には連載記事や取材日記的なコラムに、松江堂が取り上げられている。これらの記事は、松江堂の来歴を紹介しながら、松江堂が老朽化で危険な状態であり、一日も早い復旧が望まれる、と締めくくっている。なお、平成17（2005）年の愛媛新聞には「「烈女松江」は貞女のかがみ」という見出しのついた読者（60代男性）の投稿があり、松山の漢詩人・小原六六庵（1896～1984）が「烈女松江」と題して読んだ漢詩を紹介している。

平成17（2005）年より後には、愛媛新聞の記事データベースには松江堂および井口松江に関する記事は無いが、近年、インターネットニュースで松江堂が取り上げられている。令和2（2020）年11月18日に配信された朝日新聞社が運営するサイト「withnews」の記事で、見出しには『襲ってきた男を刺した“罪” 200年の間に起きた「生き人形」の変化「貞操の象徴」から「意志貫く存在」へ』とある¹¹⁾。この記事の中心的な話題は、博多人形師・吉村利三郎（1986?～1946年）が製作した、等身大の3体の人形である（写真4）。人形は、正座して目を閉じて合掌する井口松江と、まさに苦渋の表情で抜き身の刀を手にして立つ瀬兵衛、そして傍らで提灯を持って照らす妹の千代の人形の3体で、三津の浜辺で松江が父の手にかかる直前の様子を表している。これらの人形は、元々は旧松江堂に保管されていたが、松江堂解体につき三津浜小学校に引き取られ保管されていた¹²⁾。記事は、この人形をめぐる取材をもとにしており、井口松江のエピソードの紹介やその年9月14日に松江の墓前で行われた供養祭の様子が記されている。記者は供養祭で地元の人々が手を合わせ、松江さんの民謡が歌われるのを聞いて、民謡まで作られていることに驚いている。また、毎日墓の水を変えている女性の姿を見て、地元の人たちが松江さんのことを大切に思ってきたことを実感した、という。そして、「貞節を守った」と讃え



写真4 松江親子の人形(2023年4月 川瀬撮影)

られた過去に対して、「女性の生き方が多様化した現代では、「信念を貫いた女性」として捉える人が増えているようです」と綴っている。

三津浜地区の女性に筆者が井口松江について話を聞いたり地区外の女性に井口松江のエピソードを紹介すると、「貞節を守ったから素晴らしい女性、とは思わない」という反応が殆どである。そして、「子どもの頃に松江さんの話を聞いたが、可哀想だと思った」「悲惨な話だけれど、松江さんからは意思の強さを感じる。その頃の価値観に流された受け身の女性ではないように思う」というコメントを得ている。

5. 住民における井口松江の認知度

先の愛媛新聞の記事で確認されるように、井口松江の法要に集まる人数は減少し、これは女子師範学校の卒業生や奉賛会のメンバーの高齢化によるものと推測される。それでは、今日の三津浜に暮らす人々にとって、井口松江や松江堂はどのように認知され受け止められているのだろうか。

これらのことを把握するために、令和3（2021）年3～4月にかけて、三津浜地区の2つの町内会で回覧板を利用してアンケート調査を実施した。

アンケート対象地域は、住吉1丁目町内会と松江町町内会である。松江町は現在の町名と同じ範囲が町内会構成世帯だが、住吉1丁目町内会は現在の住所表記の範囲のうち、主に三津浜商店街に面した住

宅およびそれより北側である。令和3年4月1日時点の推計人口は、住吉1丁目の375人、世帯数は197世帯、松江町の人口は213人、世帯数は106世帯であるが、町内会の回覧板を回す家庭数は住吉1丁目町内会が80世帯、松江町町内会は150世帯である。人口統計上の町丁目別世帯数と町内会の家庭数が異なるのは、住吉1丁目は昭和41年7月1日から、松江町は昭和45年6月13日から施行された公称町名変更で、町の範囲が変更されたものの、町内会は旧町の区割りで組織されているためである。また、高齢の住民が福祉施設に転居して空き家になっても住民票を残していたり、住家でない商業施設・事業所が町内会に所属することもある。それぞれの町内会の範囲は図1に示している。

住吉1丁目町内会(以下、住吉1丁目と表記する)は商店街の三津駅側付近であり、戦前・戦後から商店を営み、商店を廃業後も住み続けている高齢者が多い。松江町町内会(以下、松江町と表記する)はかつて水田地帯だった土地に、戦後の市街地化で新しくできた住宅が立ち並んでいる。ただし、宅地化は高度経済成長期に進んだもので、今はその頃から居住した住民の高齢化が進んでいる。

アンケートは町内会長を通じて回覧板で質問票と回答ハガキを配布して、郵送にて回収した¹³⁾。住吉1丁目からは40人、松江町からは43人の回答を得た。質問項目によって無回答がいくらか見られたが、回答者によって無回答の項目が異なるため、以下の記述では回答があった項目全てについて、無回答(不明)も含めて考察する。なお、アンケートの依頼文章と質問項目を記載した紙の裏面には、井口松江の逸話や松江堂の来歴について、できるだけ井口松江を賛美するような価値判断を伴わない説明を掲載して、回答者がそもそも井口松江や松江堂についての知識がない場合でも、これらについての知識を有した上で考えを回答できるようにした。

回答者の属性(表3)は、住吉1丁目はやや女性が多いがほぼ男女半々から回答を得た。両町内会とも回答者の年齢は40歳以上が7割以上で、30年以上居住している人が6割以上である。出生地については差異があり、住吉1丁目は半数以上が三津浜地

区で生まれているのに対し、松江町は三津浜地区生まれが35%、三津浜で生まれ育っていない人のほうが多い。

回答を住吉1丁目と松江町に分けて集計した(図3)。それぞれの質問は、「あなたに当てはまるものを選んでください」と指示して回答を求めた。「松江堂や井口松江さんについて以前から知っている」という項目に対して、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計は、住吉1丁目が42%、松江町は48.8%と松江町のほうがやや高い。井口松江についてまったく知識のない人の割合は、どちらの地区も回答者の3割以上いた。「井口松江さんは素晴らしい女性だと思う」に対して、住吉1丁目では「とてもあてはまる」が30%なのに対して松江町では18.6%であり、住吉1丁目のほうが積極的に肯定的な評価をする人の比率が高い。ただし、住吉1丁目では「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の回答が15.0%ずつと松江町より高い。「松江堂や井口松江さんについて、後世に広く伝えていくべきだ」に対して、住吉1丁目では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」がそれぞれ40.0%、12.5%と半数を超えるのに対して、松江町では20.9%、7%である。松江町で後世に伝えていくべきだと考える

表3 アンケート回答者の属性

質問	属性	住吉1丁目		松江町	
		人数	(%)	人数	(%)
性別	男性	15	37.5	18	41.9
	女性	19	47.5	18	41.9
	不明	6	15.0	7	16.3
年齢	20歳未満	0	0.0	0	0.0
	20~39歳	2	5.0	6	14.0
	40~69歳	18	45.0	20	46.5
	70歳以上	15	37.5	12	27.9
	不明	5	12.5	5	11.6
出生地	三津浜地区	22	55.0	15	34.9
	松山市内	11	27.5	10	23.3
	松山市以外	4	10.0	12	27.9
	不明	3	7.5	6	14.0
現在地の居住年数	10年未満	6	15.0	8	18.6
	10~29年	6	15.0	5	11.6
	30年以上	25	62.5	26	60.5
	不明	3	7.5	4	9.3

住吉1丁目 (回答 40人)

松江町 (回答数 43人)

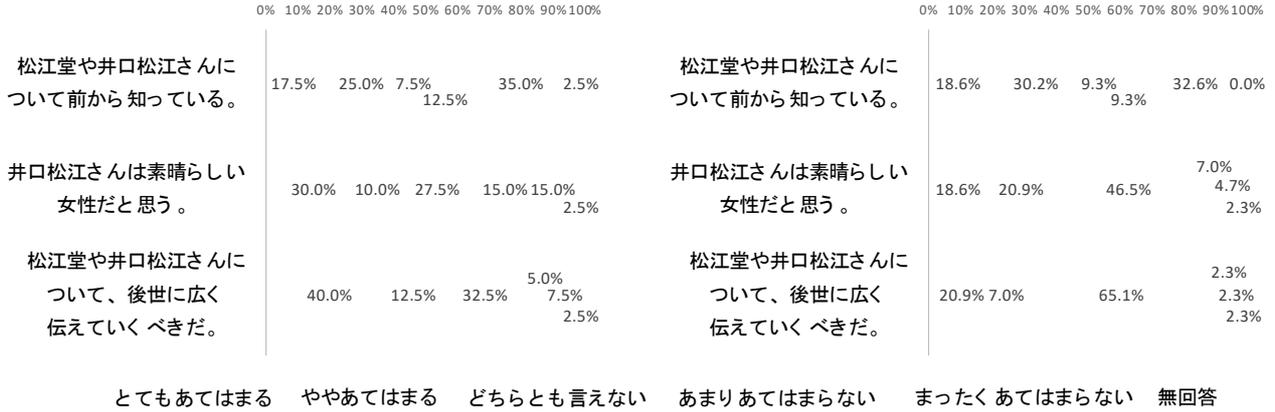
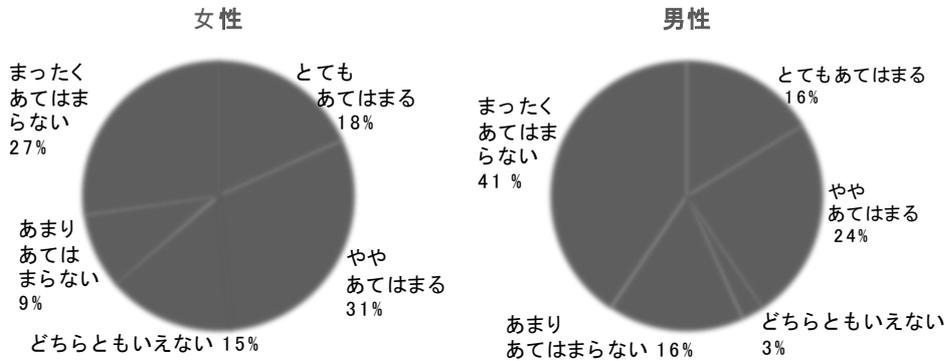
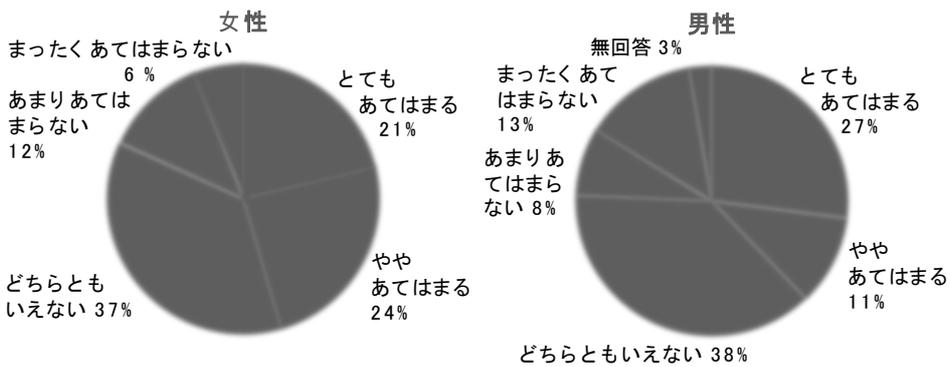


図3 アンケート結果(地区別)

松江堂や井口松江さんについて前から知っている。



井口松江さんは素晴らしい女性だと思う。



松江堂や井口松江さんについて、後世に広く伝えていくべきだ

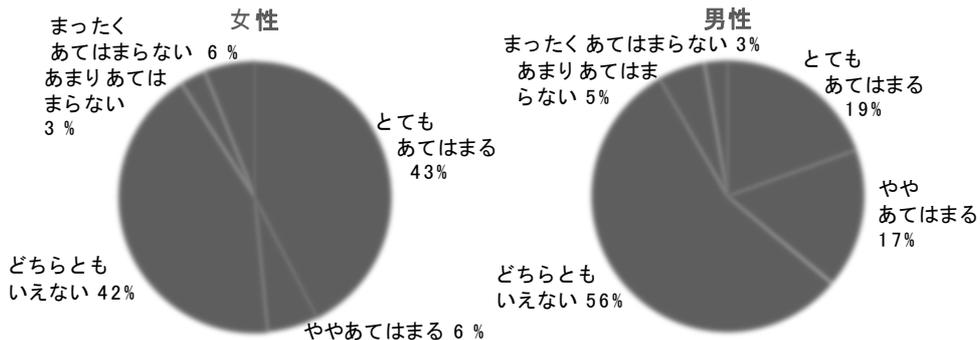


図4 アンケート結果(男女別)

表4 井口松江への評価と後世への継承についてのクロス集計

あなたにあてはまるものを選んでください		松江堂や井口松江さんについて、後世に広く伝えていくべきだ。		
		とてもあてはまる ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない まったくあてはまらない
井口松江さんは 素晴らしい女性だと思う	とてもあてはまる ややあてはまる (34名)	26名 (76.5%)	8名 (23.5%)	0名 (0%)
	どちらでもない (31名)	3名 (9.7%)	25名 (80.6%)	3名 (9.7%)
	あまりあてはまらない まったくあてはまらない (17名)	5名 (29.4%)	8名 (47.1%)	4名 (23.5%)

人は、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」よりは多いものの、継承の意思を持つ人は住吉1丁目ほど多くはない。

次に、回答者の性別によって、松江に対する認知や評価に違いはあるのか、両地区とも合わせて男女別に比較する。井口松江や松江堂の認知度については、女性が「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計で49%なのに対して、男性は40%とやや低い。「まったくあてはまらない」は女性が27%、男性が41%なので、半数近くの男性が松江に関してまったく知らないことになる。「井口松江さんは素晴らしい女性と思う」の回答では、女性のほうがそう思う人が半数近くで多い。「後世に伝えていくべきだ」の項目では、男性が「とてもあてはまる」「ややあてはまる」がそれぞれ19%と17%であるのに対して、女性は43%と6%である。女性はほぼ半数の人が「後世に伝えていくべきだ」と積極的に考えている。

では、例えば「井口松江は素晴らしい人だ」と考える人（「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答した人34名）と、そう思わない人（「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人17名）では、井口松江についての継承について、考えに違いはあるのだろうか？「松江堂や井口松江さんについて、後世に広く伝えていくべきだと思う」について、井口松江を素晴らしいと考える人は「とてもあてはまる」「ややあてはまる」が26名（76.5%）だったが、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」は皆無だった。井口松江を素晴らしいとは考えない人は、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」が5名（29.4%）で、「あまりあてはまらない」は0名、「まったくあてはまらない」は4名（23.5%）である。

以上のアンケート結果について考察する。井口松江の伝承について、松江町住民は住吉1丁目の住民より認知がやや高かった（図3）。井口松江を素晴らしい女性と評価する割合は、どちらの町でも約4割だったが、住吉1丁目の方がそのように評価しない人の比率（「ややあてはまらない」「まったくあてはまらない」の合計）が3割で、評価がはっきり分かれている傾向にある。「松江堂や井口松江さんについて後世に広く伝えていくべき」と考える人の比率が、町名の由来ともなった松江町より住吉1丁目の方が有意に高い。

男女別の集計結果（図4）からは、井口松江の認知度は女性の方が高く、男性は認知している人もいるが全く知らない人が多いことがわかった。男女ともに、「井口松江は素晴らしい」と評価する人が約4割いる。「松江堂と井口松江について後世に広く伝えていくべきか」については、女性の方が積極的に伝えていくべきだと考えている傾向にある。「井口松江は素晴らしい」と評価する人が、後世に伝えていくべきだと考えるのは当然と言えるが、「井口松江は素晴らしい」と評価しない人の中にも、後世に伝えていくべきだと考える人が少なからずいる。その人々は、松江堂や井口松江の何を伝えていくべきだと考えているのだろうか。

井口松江に関しての評価や後世への継承については、「どちらとも言えない」と明確に判断できない住民が多数いる。特に松江町でその傾向が強い。これについては、そもそも、井口松江や松江堂に関する認知が低いこと、井口松江や松江堂の継承に対する関心が低いこと、現代の価値観とは異なる松江親子の振る舞いに対して判断に迷っていることなど、いくつかの要因が考えられる。

6. 歴史の継承の観点から見た井口松江

井口松江に対する評価は、時代によって、あるいは評価する人の立場や置かれた状況によって変化してきた(図5)。松江に対する「評価」が、それぞれの時代の人々の間で様だったはずはないが、その時々の特定の人物または組織の評価に基づいて、顕彰碑や松江堂が建てられたり、出版物が発行されたのは歴史的な事実である。

松江親子の行いが武士道・忠孝の視点で時の為政者から称賛されたのに対し、庶民は「悪縁切り」を祈願するために墓参していた。しかし、明治期に入って、松江は婦女の鑑として位置付けられ、信奉者による啓蒙活動が、文芸や信奉者の組織化、記念碑の建立という形で進められた。大政翼賛会愛媛支部が先賢偉人として『烈女松江傳』を上梓したように、銃後の日本を守る女性の育成に利用された。特に、私立愛媛高等女学校や愛媛県女子師範学校の女子教育における松江の奉賛は、当時の女学生の青春の思い出の一部として、女性達の記憶に残っていた可能性がある。

また、昭和45(1970)年の町名変更や橋梁の命名、昭和49(1974)年の松江様奉賛会の発足や松江堂など、1970年代は特に、地域住民にとって井口松江や松江堂は地域のシンボルとしての愛着や思い入れがあったと推測される。井口松江の伝承を後世に継承させたり地域外に示していこうという強い意識

があったと考えられる。

アンケート結果からは、現在は三津浜生まれや三津浜に長く居住する地域住民でも、井口松江や松江堂について知っている人は半数に満たない。また、井口松江を素晴らしい女性と評価する人の比率も高くはない。その一方で、松江堂や井口松江について、後世に広く伝えていくべきだと考える人は、特に女性では半数近くに上る。図5に示したように、井口松江のエピソード(歴史的事実)に対して、時の為政者や庶民、教育者の評価は変化していったが、その時々々の評価に基づいて、書籍の刊行や松江堂の建設、女学生達による奉賛のような歴史的事実を生み出している。これら全てが総体として地域の歴史として地域住民に受け止められおり、「後世に広く伝えていくべき」という住民の意識や「地域の史跡として松江堂を再建する」というまちづくり協議会の事業につながったと考えられる。

松江堂の再建に対しては、「貞節を女性に求める古い価値観を肯定するのか」「“家に迷惑がかかる”と自分を犠牲にする行為を美化するのか」という批判が、一部住民から挙げられた。しかし、まちづくり協議会にそのような意図はなく、あくまで「史跡として継承する」と考えている。

井口松江は実在した人物であり、埋葬された当時は鎮魂・慰霊のために墓石が立てられたと推測される。しかし、縁切り祈願のため遊郭の女達に参拝さ

江戸時代	<p>事実 井口松江が襲われ、身を守るために相手を殺めた。自害しようとした末、父親の瀬兵衛が斬首した</p>	<p>評価+事実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松平定通が、松江が貞節を守ったことを顕彰した。 ・大洲藩が、松江が貞節を守ったことと瀬兵衛の忠義を評価し帰藩を許した。
明治時代 大正時代		<p>評価+事実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「縁切り」を望む男女が参拝・祈願する。 ・井口松江を「望ましい女性像」として讃え、琵琶歌や小説が作られる。 ・愛媛県高等女学校を中心に松操会が作られ、記念碑や唱歌が作られる。 ・大政翼賛会愛媛支部が先賢偉人として『烈女松江傳』を上梓。
昭和期 (戦前)		<p>評価+事実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・烈女松江様奉賛会が松江堂を建立する。
(戦後)		
平成		<p>評価+事実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・井口松江の墓や松江堂を大切に思い守ってきた人々がいた。 ・松江堂を地域で継承すべき史跡として位置付け、再建する。 ・井口松江は古い価値観の中で命を落として、かわいそう。 ・井口松江は自ら判断して当時の規範を守った意志ある女性。
令和		

図5 井口松江をめぐる評価と事実

れるようになると、墓石は鎮魂・慰霊のためのものから、祈願と崇拜のための祈念碑に変化した。遊郭の女達という限定的な属性の人が個人的に参拝していたとはいえ、墓石は祈願と崇拜の場という空間性を帯びてくる。更に、烈女という価値の転換が計られながら石碑が建立されたり松江堂というお堂が作られることで、空間性・場所性は高まっていった。

ところで、ある場所や建造物にまつわる歴史的現象は輝かしいものばかりではなく、戦争や差別、自然災害や公害など、悲惨なものや非人道的な事象にまつわるものもある。戦争に関わるものとしては沖繩のガマ、広島原爆ドームやアウシュビッツ強制収容所など、差別に関わるものとして日本各地のハンセン病療養所、自然災害に関わるものとして2011年東日本大震災の災害遺構、環境問題に関わるものとしてチェルノブイリ原発や足尾銅山、水俣のような公害発生地などがある。このような建物や場所を「負の遺産」として観光資源とするダークツーリズムは、特に2011年東日本大震災の福島原発事故を契機に注目されるようになった。ダークツーリズムは基本的に負の遺産が存在する地域の外の観光客を対象としているが、負の歴史的遺産を継承していくことを目的としている点で、その視点はその地域住民がどのように歴史的遺産を保存・継承していくか論考する際に有効である。

親泊(2012)は日本におけるダークツーリズムの可能性や課題について整理している。ダークツーリズムの一般的な定義として、「死、悲劇、災害などにまつわる観光」とし、ホロコーストや奴隷貿易港など、ダークツーリズムの歴史や分類を紹介している。そして、「ダークツーリズムの場所というのは現代の孤立化した社会の中で、集団的共感を感じられる場所でもあり、このツーリズムを通して、道徳の勘を取り戻すこともできるのである」と述べている。これはダークツーリズムの普遍的価値についての文脈で述べられているが、まさに戦前の松江堂は「烈女」への集団的共感を感じる装置として働き、儒教的道徳を人々に植え付けていったといえる。

筈谷・阿部(2019)は、戦争遺跡・震災遺構・人

種差別・公害など悲しみの記憶に関わる遺産を「負の遺産」と位置づけ、その中でも「国家や社会構造によって展開された差別や抑圧、暴力の記憶」に関わる遺産を「悲劇の遺産」として、ハンセン病施設の継承活動について論じている。残存度の異なる3つのハンセン病施設の保存をめぐる議論の経緯を考察した結果は以下のようなものである。空間の残存は記憶の継承の持続に対して有益に働き、空間の残存には議論による価値の共有を必要とする。どちらか一方が欠けては記憶の継承は効果的になされない。次に記憶の継承においては、空間の残存程度よりも議論による価値の共有が重要な役割を果たすことが確認できる。なぜならば、空間を保存する意義が関係者間で共有されなければ、空間の残存そのものが脅かされるからである。筈谷・阿部(2019)の考え方に即して松江堂について検討してみると、松江堂は一度解体されて墓石が残るのみとなったが、墓碑の手入れをしていた女性達とまちづくり協議会で、井口松江について後世の伝えていこうという価値の共有がなされていたため、再建という形で残存することとなった。一方で、住民に中での井口松江に対する認知度は決して高いとはいえないが、松江堂の再建が井口松江について後世に伝えていくことに有益に働く可能性がある。とはいえ、松江町の年配の住民が「公園に石碑があるのは知っていたが、何の石碑がよく知らずにいた」というように、歴史的建造物や石碑があればそれだけで良い訳ではなく、それを理解するきっかけや仕組みづくりが求められる。

松江堂に近い三津浜小学校では、かつての郷土学習、最近のまち探検の一部として、松江の墓跡と顕彰碑を訪れていたことがあるという。しかし、事の発端が異性間のトラブルであることや父が娘の命を奪う悲惨さから、小学生の学習には適切と言いが難いと判断されて、ここ最近では訪問することは無いという。

井口松江落命のできごとは、ともすればスキャンダラスな悲劇に矮小化される。しかし、この悲劇がなぜ、誰によって、現在まで継承されてきたのか、折々の地域社会の様相(遊郭があって栄えていた近

代の三津浜) や日本全体の規範意識(戦前の儒教的価値観や政治的利用) と関連づけていくこと。それ自体が、地域における歴史の継承の一つのあり方である。

7. おわりに

本稿では、松山市三津浜地区で起こった歴史的事象としての井口松江に関わる事件と、井口松江に対する評価がどのように変遷したのか整理した。井口松江と瀬兵衛の振る舞いは江戸時代および戦前の価値観で賛美され、賛美する者の「女性は貞節を守るべし」「女性は家のために身を捧げるべし」という理想的な女性像を広く世に知らしめることに利用されたとも言えるかもしれない。だからといって、その歴史的事実を人々の記憶から葬り去るのではなく、一つのエピソードが、時代によってあるいは個人の立場や価値観によって、さまざまな受け取られ方をされる一つの事例として継承していくことを提案したい。松江堂とともに青春時代を過ごした女学生達はすでに高齢となり、やがて姿を消すだろう。墓碑の周りに御堂を再建したからといって、人々が無関心でいては、歴史が継承されたとは言えない。井口松江が戦前には婦女教育の文脈で特定の価値基準の再生産に利用されたこと自体が歴史的事実であり、そのことも踏まえて、現在の人権意識と照らし合わせながら後世に伝えていくという方法があるのではなかろうか。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、三津浜地区まちづくり協議会の皆様、住吉1丁目と松江町の町内会長および住民の皆様には、お世話になりました。また、愛媛大学教育学部社会科教育講座の同僚諸氏からは、本稿執筆に大きな示唆をいただきました。大久保守登氏からは井口松江と松江堂建設に関する未公開の論考を拝読させていただき、松江と松江堂建設の歴史的意義づけについて議論を交わして考察を深めることができました。井口健氏からは積年の成果を公開されたものをお知らせいただきました。記して感謝いたします。

註

- 1) 旧ソ連の最高指導者ヨシフ・スターリンの出身地であるグルジアの都市ゴリの中央広場に建っていたスターリン像は1952年に設置されたが、旧ソ連の崩壊後に独裁者の像と位置づけられ、スターリンを郷土の誇りと考える住民の反対もあったが、2010年に撤去された。また、ウクライナには5500体のレーニン像があったが、2015年に脱共産主義が公式に始まり、すべて撤去されたという。
AFP BB News 「スターリン像を出身地の中央広場から撤去、グルジア <https://www.afpbb.com/articles/-/2737832> (2024年8月31日確認)
National Geographic 「壊されたレーニン像の今」 <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/photo/17/030600058/> (2024年8月31日確認)
- 2) ロバート・E・リー将軍が率いた南部連合軍は奴隷制維持を掲げており、銅像は白人至上主義を具現化したものであるとされ、2021年に撤去された。
BBC NEWS JAPAN 「衝突と死者の原因になった南部将軍の銅像、4年経て撤去」 <https://www.bbc.com/japanese/57793403> (2024年8月31日確認)
- 3) 「二宮金次郎像：勤勉精神いまは昔、各地で撤去相次ぐ」(毎日新聞、2012年1月25日付)
- 4) 例えば、平成25(2013)年に新潟県長岡市に建立された医学者・教育者の長谷川泰の銅像、平成30(2018)年に没後200年を記念して千葉県香取市に建立された測量家・伊能忠敬の銅像、令和5(2023)年に福岡市に建立された女性儒学者・教育者の高場乱の銅像など。
- 5) 筆者は令和2(2020)年4月より三津浜地区まちづくり協議会まちおこし部長を務めている。
- 6) 愛媛県立図書館 (1973) 烈女松江の碑 (1972年撮影写真) 『四時園関係資料写真帖』愛媛県立図書館
- 7) 井口(2024)によると、松江堂の解体は平成17(2005)年とされている。
- 8) 再建記念式典はコロナ禍で延期されていたが、2021年6月26日に挙行された。また、令和4(2022)年1月30日にはまちづくり協議会主催で松江堂再建記念シンポジウム「三津の浜辺に散った花―“烈女”松江の

